

身延山における和紙研究プロジェクト

身延和紙研究会 [身延山大学]

望月 孝政、丸茂 泰知、谷口 玄樹、郷 宗龍、児玉 伍、松島 正賢、田中 伸尚、佐藤 文哉

概要

身延町には日蓮宗の総本山である身延山久遠寺が所在している。その周辺である門前町は、観光業で栄えているが、コロナ禍の影響、また、仏教離れの影響から、近年殊に参拝者が著しく減少している。そこで、観光業以外の視点から、これまで注目されていなかった産業に着目し、特に750年前に日蓮聖人が身延で使用していたと考えられる和紙を研究し、その製法を現代において再現し、「伝統産業」として位置付けられるよう地域産業と連携し、将来的に全国へ販売することで、地域活性の一端を担うことを目的として本プロジェクトを始動した。

問題の所存

歴史的にみても、日蓮聖人は、同時代の他の僧侶などに比べ、とても筆まめであったと考えられ、非常に多くの著作や書簡・手紙が残されている。その数は約600点ともいわれ、現存が確認できる真筆も数多い。また、そのうちの8割以上が、日蓮聖人晩年足掛け9年間を過ごされたここ身延山で書かれたものと言われている。

また、近年行われた日蓮宗の「日蓮聖人真蹟御本尊修理事業」において明らかになった事実により、身延期における料紙（和紙）には特徴がみられるものの、その紙の入手については未開拓の分野であって、その原材料や製法、産地や歴史など、新たな発見とともに、疑問点や解明されるべき課題も見られるようになった。

そこで、当研究会において、日蓮聖人が身延期で使用した和紙は、この地で作られたであろうことを想定して「身延和紙」と名付け、その歴史や製法などを幅広く探求することを第一の目的とする。具体的には、実際に和紙を漉き、使用された紙の再現を目指し、さらに販路を確立して、地域産業として町に根付かせることをも大きな活動目標の一つとして考えている。

身延町には750年以上の歴史がありながら、その歴史の長さに見合った産業がなく、この750年もの歴史を背景にした産業（特産）を作ること、地域を活性化することが可能となり、観光業にも大いに寄与することができるのではないだろうか。

活動内容

2022年度の活動内容として、4月～6月は課題の抽出と今後の方向性、計画を確定した。

問題の所在は、顧問や他の先生方の指南で、前述のとおりではあるが、具体的な課題について検討する以前に、プロジェクトメンバーの共通の認識や、基礎知識が調べていないことが確認され、まずは毎月1回、計3回の学習会を実施した。

これにより、日蓮聖人がいかに多くの書物やお手紙を書かれていたのか、それも足掛け9年間という身延期に集中しているのか、また、使用目的（著作や書状の執筆や大曼荼羅本尊の揮毫など）によって、料紙を使い分けていたことなどがわかった。

また、現在、身延町内にある「なかとみ和紙の里」で知られている、所謂「西嶋和紙」との違いについても確認できた。

それを踏まえ、7月～9月はフィールドワークを行った。

まず7月は、顧問と代表者が、身延町、身延クラフトパーク、なかとみ和紙の里を訪問し、施設見学とともに、協力者を要請した。

8月には、プロジェクトメンバーで、なかとみ和紙の里にて、和紙漉き体験をした。これは、所謂観光客向けの体験であるが、メンバー一同、初めての体験で、大変に参考となった。

9月は、顧問より各課題を示され、それぞれが研究活動を行った。

10月～12月の期間では和紙漉き実習を行った。今回は「体験」ではなく「実習」として、身延クラフトパーク内の和紙工房で、技術者の宮本氏の説明、指導の下、原料である楮を蒸したものをほぐすところから紙が出来上がるまでの実習を体験した。

右の図はその実習内容の一端を紹介したものである。

実習内容



図1. 楮

※和紙の原料としては、多くの植物が使われているが、代表的なものに、「ミツマタ」と「楮」がある。

※西嶋和紙は、ミツマタを使った、特に「書道用紙」が有名であるが、日蓮聖人の料紙は、ほぼ全てにおいて楮の和紙が使われている。

※歴史的にも楮の方が古く、本プロジェクトでは、楮和紙の研究を中心とし、楮を使用して、日蓮聖人の料紙再現を試行していく。

※原料である楮の木を、和紙の材料として使える状態にするために、最初に行うのがこの工程。



図2. 楮を蒸す



図3. 蒸した楮の皮を剥く

身延山における和紙研究プロジェクト

実習内容



図4. 楮の繊維

※ここで皮がきれいに剥がせないと、出来上がりが汚くなってしまふ。

※この繊維が、和紙になる。

※繊維をほぐし、それを木の棒で叩いて細かくしていく。

当然だが、繊維が太く長い状態では、ゴワゴワとしていて、「味がある」かもしれないが、書いたり保存したりするには適さない。

※日蓮聖人が用いられた料紙を再現するためには、この何倍も何度も何度もたたかなければ、使用に堪え得るものにはならない。

今回は時間の都合で、目指すところの遥かに手前で終了。

粗い繊維のまま行った。



図5. 繊維をほぐす



図6. 叩いてさらに繊維をほぐす

※ここで、均一になるように溶くが、今回は太くて長い粗い材料を使用しているため、うまく溶けない。

※この状態から、つなぎを使わずに、そのまま漉く方法もあるが、その工法だと、仕上がった紙は、ゴワつとした厚みのあるものになってしまう。

※現在の研究段階では、「つなぎ」を使って、薄く滑らかに仕上げる方法を選ぶこととする。

※写真は、すでにトロロアオイを溶かした状態のもの。



図7. 叩いた繊維を水に入れさらにほぐす



図8. トロロアオイ

※この「トロロアオイ」の根から出るとろみ成分が、つなぎとなる。

※「つなぎ」には、さまざまなものを使われていたようで、他の植物や海藻なども使っていたそう。

※今回は、とろみの収穫量も多く、ポピュラーなトロロアオイを使用した。

※なお、日蓮聖人の料紙が何を使ったかは不明。

身延山における和紙研究プロジェクト

身延和紙研究会 [身延山大学]

実習内容

※このような木枠を使って紙を漉く。この木枠の大きさによって紙のサイズが決まり、それによって工房も特定することができる場合がある。

※日蓮聖人の料紙を再現する場合には、ご真筆のサイズを確認して、相応の枠を制作することを検討。

※原材料や道具類、全てにおいて、手に入りにくくなっている状況とのこと。確保するために、できるだけ早くすべきとの指摘を受けた。

※実際の作業として、この段階の技術は、見るよりも実践は、遥かに難しく、この技術を身につけるだけでも時間がかかるものと思われた。
安定した品質にしていくためには、学生の力だけでは難しいことを実感した。



図9. 紙漉く木枠

※実際に実習の中で漉いた和紙の一部。職人の漉いた和紙と素人である学生が漉いた和紙を比べると、その差が歴然である。

※職人から、一つの芸術・作品として見るならば、学生の漉いた和紙も価値を見出すことができるかもしれないと言われたが、今回はあくまで実用品として文字を書くことを考えると、均一に、使用に耐えうるものを作成しなければならない。

※やはり熟練した経験と技術が必要となる。

成果と課題

今年度の研究活動において、机上の研究が実習を通して、現実的な展望に変わった。本プロジェクトメンバーの意識はもちろんだが、今回、ご指導いただいた技術者の宮本氏も、大いに展望を抱いていただき、今後、さらに協力的に連携しながら本プロジェクトを進めていくことを約束された。

2023年度も研究を継続し、場合によっては自前の紙すき工房を整えて、更なる研究に挑みたい。

またさらなる研究課題としては、日蓮聖人の料紙にみられる「染色」の研究や、筆や墨、硯なども同時に探求をおこなっていききたい。

2025年度を目処に製品化と実売を開始したいと思っているので、研究と技術の向上と同時に進めていきたい。

紙の目処が立ってきたところで、鎌倉時代に使われていたであろう筆や墨、硯を使って、実際に書いてみて、日蓮聖人の御真筆と同じように書けるかどうか、そのような検証もしたいと思っている。

また、販売方法、販売所などの確保のため、様々な場面でプレゼンテーションを行い、交渉をしていきたいと考えている。

この「身延和紙」の生産が実現すれば、時を超えて「伝統産業」が復活できる。これを750年の伝統に代えられるまでに、さらに研究活動を続けていきたい。



図12. 学生の漉いた和紙②



図10. 職人の漉いた和紙



図11. 学生の漉いた和紙①



図13. 学生の漉いた和紙③